

調 査 票

番 号	6	所管府省名	農林水産省
-----	---	-------	-------

独立行政法人名 (HPアドレス)	独立行政法人農業生物資源研究所 (http://www.nias.affrc.go.jp/)	特定・非特定 の別	非特定
---------------------	--	--------------	-----

1 組織名及び職員数等

	組 織 名	職員数(役員を除く)	
		常 勤	非常勤
移行前(発足時の前日)	農林水産省農業生物資源研究所、蚕糸・昆虫 農業技術研究所、(畜産試験場、家畜衛生試 験場)	439人	364人
	プロパー職員数	439人	364人
	所管官庁からの出向者数	0人	0人
	所管官庁以外の官庁からの出向者数	0人	0人
	その他	0人	0人
発足時 (平成13年4月1日現在)	独立行政法人農業生物資源研究所	431人	352人
	旧組織からの移行者(プロパー職員)数	411人	333人
	所管官庁からの出向者数	6人	0人
	所管官庁以外の官庁からの出向者数	1人	0人
	移行後の採用者数	7人	19人
	その他(他の独法からの出向)	6人	0人
平成14年4月1日現在	同 上	426人	453人
	旧組織からの移行者(プロパー職員)数 (注1)	371人	295人
	所管官庁からの出向者数	10人	0人
	所管官庁以外の官庁からの出向者数	2人	0人
	移行後の採用者数	19人	158人
	その他(育児休業職員の代替職員)	1人	0人
	その他(他の独法からの出向)	21人	0人
	その他(地方自治体からの出向)	2人	0人
平成15年4月1日現在	同 上	424人	484人
	旧組織からの移行者(プロパー職員)数 (注2)	345人	289人
	所管官庁からの出向者数	12人	0人
	所管官庁以外の官庁からの出向者数	2人	0人
	移行後の採用者数	27人	195人
	その他(育児休業職員の代替職員)	1人	0人
	その他(他の独法からの出向)	34人	0人
	その他(地方自治体からの出向)	2人	0人
	その他(公益法人からの出向)	1人	0人
平成16年4月1日現在	同 上	416人	465人
	旧組織からの移行者(プロパー職員)数 (注3)	317人	227人
	所管官庁からの出向者数	13人	0人
	所管官庁以外の官庁からの出向者数	4人	0人
	移行後の採用者数	34人	238人
	その他(育児休業職員の代替職員)	1人	0人
	その他(他の独法からの出向)	45人	0人
	その他(地方自治体からの出向)	1人	0人
	その他(公益法人からの出向)	1人	0人

平成17年4月1日現在	同 上	400人	465人
	旧組織からの移行者(プロパー職員)数	292人	201人
	所管官庁からの出向者数	13人	0人
	所管官庁以外の官庁からの出向者数	4人	0人
	移行後の採用者数	40人	264人
	その他(他の独法からの出向)	49人	0人
	その他(地方自治体からの出向)	1人	0人
平成18年4月1日現在	同 上 (非特定独立行政法人へ移行)	396人	460人
	旧組織からの移行者(プロパー職員)数 (注4)	275人	165人
	所管官庁からの出向者数	16人	0人
	所管官庁以外の官庁からの出向者数	4人	0人
	移行後の採用者数	51人	295人
	その他(他の独法からの出向)	49人	0人
	その他(公益法人からの出向)	1人	0人
平成19年4月1日現在	同 上	390人	478人
	旧組織からの移行者(プロパー職員)数 (注5)	265人	136人
	所管官庁からの出向者数	19人	0人
	所管官庁以外の官庁からの出向者数	4人	0人
	移行後の採用者数	55人	342人
	その他(育児休業職員の代替職員)	1人	0人
	その他(他の独法からの出向)	45人	0人
	その他(公益法人からの出向)	1人	0人
備考:(注1) うち育児休業者(2名)を含む。 (注2) うち育児休業者(1名)を含む。 (注3) うち育児休業者(3名)を含む。 (注4) うち育児休業者(1名)を含む。 (注5) うち育児休業者(2名)、退職者(1名)を含む。			

2 指定職又は役員数等

	役員数等		
	常 勤	非常勤	
移行前(発足時の前日)	2人	0人	
発足時(平成13年4月1日現在)	4人	1人	
	移行前において指定職・役員であった者の数	2人	0人
平成14年4月1日現在	4人	1人	
	移行前において指定職・役員であった者の数	2人	0人
平成15年4月1日現在	4人	1人	
	移行前において指定職・役員であった者の数	0人	0人
平成16年4月1日現在	4人	1人	
	移行前において指定職・役員であった者の数	0人	0人
平成17年4月1日現在	4人	1人	
	移行前において指定職・役員であった者の数	0人	0人
平成18年4月1日現在	4人	1人	
	移行前において指定職・役員であった者の数	0人	0人
平成19年4月1日現在	4人	1人	
	移行前において指定職・役員であった者の数	0人	0人

3 指定職・役員給与総額及び個人別給与年額

指 定 職 ・ 役 員 の 給 与 総 額	
支 給 年 度	報 酬 総 額
移行前の最終1年度間 (平成12年度)	32,890千円
発足時(平成13年度:平成13年4月～14年3月)	59,134千円
平成14年度	58,897千円
平成15年度	56,518千円
平成16年度	58,221千円
平成17年度	54,006千円
平成18年度	60,001千円
備考 (注1) 役員は、非常勤を含む。 (注2) ガイドラインに基づく給与水準公表資料に記載されている額を記載。 ただし、14年度以前は、ガイドラインに基づく給与水準の公表が行われていないので財務諸表の附属明細書に記載されている額を記載。	

指 定 職 ・ 役 員 個 人 別 の 給 与 年 額		
支 給 年 度	役 職 名	報 酬 年 額
移行前の最終1年度間(平成12年度)	A農林水産省農業生物資源研究所長	未公表のため記載せず
	B農林水産省蚕糸・昆虫農業技術研究所長	未公表のため記載せず
発足時(平成13年4月～14年3月)	理事長	未公表のため記載せず
	理事(2名)	未公表のため記載せず
	監事	未公表のため記載せず
	監事(非常勤)	未公表のため記載せず
平成14年度	理事長	未公表のため記載せず
	理事(2名)	未公表のため記載せず
	監事	未公表のため記載せず
	監事(非常勤)	未公表のため記載せず
平成15年度	理事長	17,121千円
	理事(2名)	27,534千円
	監事	11,097千円
	監事(非常勤)	766千円
平成16年度	理事長	17,109千円
	理事(2名)	29,206千円
	監事	11,078千円
	監事(非常勤)	828千円
平成17年度	理事長	15,734千円
	理事(2名)	26,712千円
	監事	10,126千円
	監事(非常勤)	1,434千円
平成18年度	理事長	17,551千円
	理事(2名)	29,882千円
	監事	11,175千円
	監事(非常勤)	1,393千円
平成19年度(4月～9月までの6カ月分)	理事長	8,821千円
	理事(2名)	12,971千円
	監事	4,284千円
	監事(非常勤)	840千円
備考 (注1) 役員は、非常勤を含む。 (注2) ガイドラインに基づく給与水準公表資料に記載されている額を記載。		

4 役員氏名等

(平成19年4月1日現在)

氏名	公務員 経験	独法等 役員経験	役職名	就任年月日	就任時年齢
経歴					
兼職先			役職名	常勤・非常勤	有給・無給
石毛 光雄		-	理事長	H17.4.1	56歳
昭和52年農林省入省 農林水産技術会議事務局研究管理官、同首席研究管理官、同首席研究開発企画官、同研究総務官 平成17.3.18退職					
-		-	-	-	-
佐々木 卓治		-	理事	H17.4.1	58歳
昭和49年文部省入省 (独)農業生物資源研究所分子遺伝部上席研究官、同ゲノム研究グループ長 平成17.3.31退職					
-		-	-	-	-
新保 博		-	理事	H19.4.1	57歳
昭和48年農林省入省 (独)農業生物資源研究所企画調整部企画室長、同企画調整部長、同統括研究主幹 平成19.3.31退職					
-		-	-	-	-
一川 邦彦	-	-	監事	H19.4.1	62歳
川崎化成工業(株)常勤監査役 平成19.3.31退職					
-		-	-	-	-
堀尾 義矩	-	-	監事(非常勤)	H19.4.1	67歳
日清オイリオグループ(株)常勤監査役 平成15.6.27退職 平成17.4.1 (独)農業生物資源研究所 監事					
-		-	-	-	-

5 退職金支給総額等	引き続き調査中
-------------------	----------------

6 独立行政法人評価委員	引き続き調査中
---------------------	----------------

13 独立行政法人から他の法人等への出向職員数等 **引き続き調査中**

14 中期計画の数値目標等

計画期間	第1期 平成13年 ~ 17年					
中期計画に定められた数値目標一覧						
	中期計画期間	13年度計画	14年度計画	15年度計画	16年度計画	17年度計画
(1)経費節減:	前年度比 1%	-	-	-	-	-
(2) 直ちに利活用できる成果:	10件以上	-	-	-	-	-
(3) 論文の公表:	1,740報以上	-	-	348報以上	348報以上	348報以上
(4) 国内特許の出願:	200件以上	-	-	40件以上	40件以上	40件以上
(5) 新品種申請:	5件以上	-	-	-	-	-
	達成状況			評価結果		
発足時(平成13年4月~14年3月)	上記項目における当該年度の指標について、それら指標を達成した。			A: 計画に対して業務が順調に進捗している		
平成14年度	上記項目における当該年度の指標について、それら指標を達成した。			A: 計画に対して業務が順調に進捗している		
平成15年度	上記項目における当該年度の指標について、それら指標を達成した。			A: 計画に対して業務が順調に進捗している		
平成16年度	上記項目における当該年度の指標について、それら指標を達成した。			A: 計画に対して業務が順調に進捗している		
平成17年度	上記項目における当該年度の指標について、それら指標を達成した。			A: 計画に対して業務が順調に進捗している		

計画期間	第2期 平成18年 ~ 22年					
中期計画に定められた数値目標一覧						
	中期計画期間	18年度計画	19年度計画	20年度計画	21年度計画	22年度計画
1 業務運営の効率化						
(1) 一般管理費:	前年度比 3%					
(2) 業務経費:	前年度比 1%					
(3) 人件費:	5%以上					
2 研究成果等						
(1) 直ちに利活用できる成果:	10件以上	2件以上	2件以上			
(2) 論文の公表:	1,460報以上	292報以上	292報以上			
(3) 論文インパクトファクター:	3,300以上	660以上	660以上			
(4) プレスリリース:	100回以上	20回以上	20回以上			
(5) 国内特許の出願:	200件以上	40件以上	40件以上			
(6) 特許の許諾率:	6%以上	6%以上	6%以上			
(7) 新品種申請:	10件以上	2件以上	2件以上			
(8) 国際協力・交流派遣:	50人以上	10人以上	10人以上			
	達成状況			評価結果		
平成18年度	直ちに利活用できる成果、国内特許の出願及び新品種申請を除き、上記項目における当該年度の指標について、それら指標を達成した。			A: 計画に対して業務が順調に進捗している		

15 中期計画期間における特筆すべき研究あるいは業務の成果

(1) 第1期中期計画期間(平成13年度から17年度)

<p>顕微授精により子豚が誕生 - 体外成熟卵子での世界初の成功例 - (14年4月)</p>	<p>受精能力のない精子を、体外成熟卵子の細胞質内に注入する顕微授精によって、世界で初めて豚の妊娠・出産に成功した。この方法では、これまでは出産に至ることはできなかったが、低酸素下で成熟培養を行い、体外成熟卵子の品質を向上させることで一連の技術を確立することができた。</p>
<p>イオンビームと再分化技術を用いたキク新品種の開発(14年11月)</p>	<p>イオンビーム照射と植物の再分化技術を用いて、キクの原品種「大平」から6種類の実用的花色突然変異品種の育成に成功した。この技術は従来の突然変異育種に比べて、キメラのない遙かに幅広い種類の突然変異体が誘発でき、今後ほかの作物への適用が期待される。</p>
<p>カイコゲノム概要塩基配列の解読(16年2月)</p>	<p>カイコの全ゲノム(約5億塩基対)の塩基配列の解析を行い、その80%に相当する塩基配列を解読することに成功した。全ゲノムショットガン方式により得られたカイコゲノムの約3倍量の塩基配列断片をコンピュータプログラム(RAMENアセンブラー)を用いてつなぎ合わせた。</p>
<p>イネゲノム全塩基配列の完全解読(16年12月)</p>	<p>農業生物資源研究所をリーダーとする国際イネゲノム配列解読コンソーシアム(IRGSP, 10の国と地域で構成)では、イネゲノムの解析を進めて完全解読を達成し、イネゲノムは12本の染色体合計で3億9千万塩基対により構成されていることを明らかにした。我が国はこのうち最多の6本を担当し、全体の55%の塩基を解読した。イネゲノム中に存在する遺伝子数は約4万個と推定され、これらの構成や分布状況からイネゲノム構造の特徴が明らかになった。この成果を農林水産大臣に報告した。</p>
<p>植物と共生菌との共生メカニズムの解明(16年12月)</p>	<p>植物のプラスチドと呼ばれる細胞小器官に局在するタンパク質(CASTOR、POLLUX)が、菌根菌・根粒菌の植物への共生を制御していることを見出した。プラスチドが共生の過程に必要であることを示したのは世界で初めてのことである。今回明らかになったメカニズムは、共生関係を利用した環境低負荷型の持続型農業などの応用につながるかと期待される。</p>
<p>シルクフィブロインを用いた新規多孔質3次元構造体(17年5月)</p>	<p>シルクフィブロイン100%からなる多孔質3次元構造体を作出した。シンプルなプロセスで、安全性が高く、優れた力学的強度をもつ構造体が形成され、生体親和性も良好であることから、再生医療素材等のシルクの未開拓用途への活用が期待できる。</p>
<p>改変シロアリセルラーゼの大腸菌による大量生産技術(17年5月)</p>	<p>新規の酵素素材として期待される食料性昆虫起源セルラーゼはこれまで微生物による大量発現・大量生産が難しかったが、4種類のシロアリセルラーゼcDNAのランダムな相同組換えを行うことにより得られたキメラcDNAから大腸菌での大量発現に適したクローンを得て、応用素材材料へのめどをつけた。</p>
<p>カイコ中部絹糸腺での特異的遺伝子発現系の確立(17年5月)</p>	<p>酵母のGAL4/UAS系を利用して、カイコに導入した遺伝子を中部絹糸腺において効率良く発現させる方法を確立した。この方法を利用することにより、導入遺伝子由来の組換えタンパク質を中部絹糸腺で合成し、繭糸から抽出することが可能になった。</p>
<p>遺伝子組換え豚と山羊の作出(17年6月)</p>	<p>産学官共同で、家畜をバイオメディカル産業で利活用するために、体細胞クローン技術と遺伝子組換え技術を組み合わせた手法によって新たな家畜の開発に取り組み、遺伝子組換え豚と山羊の生産に相次いで成功した。今回誕生した遺伝子組換え豚は、医療用のモデル動物としての利用が期待されるもので、遺伝子組換え山羊は、生理活性物質を多く含む乳汁の生産を目的としたものであり、効率的な医薬品原料生産方法としての利用が期待される。</p>
<p>スギ花粉症緩和米によるマウスでのアレルギー症状緩和効果の証明(17年10月)</p>	<p>スギ花粉抗原の一部(ペプチド)を胚乳部分に発現させ蓄積したコメ(スギ花粉症緩和米)を開発した。このコメをマウスに経口投与すると、スギ花粉を浴びても花粉症症状(くしゃみ)が緩和されることを世界で最初に示し、コメを利用したペプチド免疫療法の有効性を科学的に証明した。さらに経口投与でのアレルギー緩和機能(免疫寛容)に関する免疫学的な作用機作を明らかにした。</p>

(2) 第2期中期計画期間(平成18年度から22年度)

<p>イネ栽培化の鍵となった脱粒性抑制遺伝子を同定 - 収量増に応用期待 - (18年4月)</p>	<p>イネが熟したときに種子が穂から落ちやすい性質(脱粒性)を抑制する遺伝子を同定し、祖先型イネの遺伝子のどの塩基配列が変化して脱粒性抑制遺伝子となり、それが古代の人の選抜を受け、現代のイネに引き継がれたことを明らかにした。インディカ型イネはジャポニカ型イネに比べると脱粒しやすいものが多く、収量を減らす原因のひとつとなっている。今回同定したこの脱粒性を抑制する遺伝子を導入すれば、収量の増加が期待される。</p>
<p>昆虫の脱皮に新たなメカニズムを発見 - 脱皮ホルモンの抑制に神経系が関与 - (18年6月)</p>	<p>昆虫が脱皮ホルモンの生合成を神経系を介して制御する機構をもつことを分子レベルで解明した。昆虫の脱皮は体内で脱皮ホルモンが合成されると開始するが、本研究では、中枢神経系からFMRFamideペプチドが神経を介して前胸腺に運ばれ、これが脱皮ホルモン合成を抑制するという機構を明らかにした。今回の発見は、ヒトのステロイドホルモン合成に関する研究にも新たな展開を生むと期待される。</p>
<p>世界最大のブタ完全長遺伝子情報の総合データベースを公開(18年11月)</p>	<p>ブタの遺伝子の塩基配列データベースを公開し、詳細な情報を広く世界中に提供した。このデータベースには、ブタの遺伝子(cDNA)の断片162,631個の塩基配列が含まれ、完全長cDNA数ではブタ遺伝子データベースの中でも世界最大のもの。ブタのDNA情報を用いた品種改良など畜産分野ばかりでなく、医学分野からも再生医療やモデル動物としてブタの利用の促進が期待される。</p>
<p>イネの遺伝子数は約32,000と推定 そのうち、29,550の遺伝子の位置を決定し、情報を公開(19年1月)</p>	<p>イネのゲノム全塩基配列上の29,550の遺伝子の位置を決定し、イネの遺伝子数は約32,000個と推定した。また、そのうち19,969(およそ70%)のイネの遺伝子の機能が説明できた。イネのゲノム塩基配列は、2004年12月に完全解読を終了したが、どのような遺伝子が塩基配列上のどこにあるかという生物学的情報を明らかにする必要があった。今回の成果は、今後のイネ研究の促進に大きく貢献するものと期待される。</p>
<p>六条オオムギは二条オオムギから進化したことが明らかに - 穂の形を制御する遺伝子の突然変異が原因 - (19年1月)</p>	<p>独立行政法人農業生物資源研究所を中心とする国際共同研究グループは、六条オオムギの起源は二条オオムギであり、穂の形を制御する遺伝子の領域に突然変異が生じて六条オオムギに進化したことを世界で始めて発見した。今回の発見は、イネ科作物の進化や栽培起源の研究ばかりではなく、作物の改良を進める上でも画期的な発見といえる。</p>

<p>16 平成18年度における支出の概要</p>	<p>引き続き調査中</p>
<p>17 行政組織から独立行政法人への再就職</p>	<p>引き続き調査中</p>
<p>18 独立行政法人から他の法人への再就職</p>	<p>引き続き調査中</p>
<p>19 出資法人一覧</p>	<p>引き続き調査中</p>
<p>20 平成18年度における売却資産等の概要 (1)有価証券 (2)固定資産</p>	<p>引き続き調査中</p>